函館なる郁雨宮崎大四郎君
同國の友文学士金田一京助君
この集を兩君に捧ぐ。予はすでに予のすべてを兩君の前に示しつくしたるものの如し。從つて兩君はここに歌はれたる歌の一一につきて最も多く知る人なるを信ずればなり。
また一本をとりて亡兒眞一に手向く。この集の稿本を書肆の手に渡したるは汝の生れたる朝なりき。この集の稿料は汝の藥餌となりたり。而してこの集の見本刷りを予の閲したるは汝の火葬の夜なりき。

著者

明治四十一年夏以後の作一千餘首中より五百五十一首を抜きてこの集に收む。集中五章、感興の來由するところ相邇きをたづねて假にわかてるのみ。「秋風のこころよさに」は明治四十一年秋の紀念なり。

一握の砂

我を愛する歌

東海《とうかい》の小島《こじま》の磯《いそ》の白砂《しらすな》にわれ泣《な》きぬれて
蟹《かに》とたはむる

頬《ほ》につたふ
なみだのごはず
一握《いちあく》の砂を示《しめ》しし人を忘れず

大海《たいかい》にむかひて一人《ひとり》
七八日《ななやうか》
泣きなむとすと家を出《い》でにき

いたく錆《さ》びしピストル出《い》でぬ
砂山《すなやま》の
砂を指もて掘《ほ》りてありしに

ひと夜《よ》さに嵐来《あらしき》たりて築《きづ》きたる
この砂山は
何《なに》の墓《はか》ぞも

砂山の砂に腹這《はらば》ひ
初恋の
いたみを遠くおもひ出《い》づる日

砂山の裾《すそ》によこたはる流木《りうぼく》に
あたり見まはし
物言《ものい》ひてみる

いのちなき砂のかなしさよ
さらさらと
握《にぎ》れば指のあひだより落つ

しっとりと
なみだを吸《す》へる砂の玉
なみだは重きものにしあるかな

大《だい》という字を百あまり
砂に書き
死ぬことをやめて帰り来《きた》れり

目をさまして猶起《なほお》き出《い》でぬ児の癖《くせ》は
かなしき癖ぞ
母よ咎《とが》むな

ひと塊《くれ》の土に涎《よだれ》し
泣く母の肖顔《にがほ》つくりぬ
かなしくもあるか

燈影《ほかげ》なき室《しつ》に我あり
父と母
壁のなかより杖《つゑ》つきて出《い》づ

たはむれに母を背負《せお》ひて
そのあまり軽《かろ》きに泣きて
三歩あゆまず

飄然《へうぜん》と家を出《い》でては
飄然と帰りし癖よ
友はわらへど

ふるさとの父の咳《せき》する度《たび》に斯《か》く
咳の出《い》づるや
病《や》めばはかなし

わが泣くを少女等《をとめら》きかば
病犬《やまいぬ》の
月に吠ゆるに似たりといふらむ

何処《いづく》やらむかすかに虫のなくごとき
こころ細《ぼそ》さを
今日《けふ》もおぼゆる

いと暗き
穴《あな》に心を吸《す》はれゆくごとく思ひて
つかれて眠る

こころよく
我にはたらく仕事あれ
それを仕遂《しと》げて死なむと思ふ

こみち　《あ》へる　の　《すみ》に
こまる
ゆふべゆふべの我のいとしさ

《あさくさ》の夜《よ》のにぎはひに
まぎれ　《い》り
まぎれ出《い》で来《き》しさびしき心

愛犬《あいけん》の　《き》りてみぬ
あはれこれも
物に　《う》みたる心にかあらむ

《かがみ》とり
《あた》ふかぎりのさま　まの顔をしてみぬ
泣き　《あ》きし

なみだなみだ
思　なるかな
それをもて　《あら》へば心　《おど》けたくなれり

《あき》れたる母の言　に
がつけば
《ちやわん》を　《はし》もて　《たた》きてありき

に　《ね》て
おもふことなし
わが　《ぬか》に　《ふん》して　は　に　べり

わが　《ひげ》の
向く癖《くせ》がいきどほろし
このごろ　《にく》き　に似たれば

の　より　《じうせい》　ゆ
あはれあはれ
《みづか》ら死ぬる　のよろしさ

大木《たいぼく》の　《みき》に　あて
小　日《こはんにち》
《かた》き　をばむしりてありき

「さばかりの事に死ぬるや」
「さばかりの事に生くるや」
《よ》せ　せ

まれにある
この　《たひら》なる心には
の　るもおもしろく　《き》く

ふと　き　れを
っとして
やがて　かに　《ほそ》をまさぐる

山《たかやま》のいただきに　り
なにがなしに　《ぼうし》をふりて
《くだ》り来しかな

何処《どこ》やらに　山《たくさん》の人があらそひて
《くじひ》くごとし
われも　きたし

《いか》る
かならずひとつ　《はち》を　《わ》り
百　十　《くひやくくじふく》　りて死なまし

いつも　《あ》ふ　の中の小　《こをとこ》の
《かど》ある　《まなこ》
このごろ　になる

《かがみや》の前に来て
ふと　きぬ
見すぼらしげに歩《あゆ》むものかも

何《なに》となく　に　りたく思ひしのみ
を　《お》りしに
ゆくところなし

家《あきや》に　《い》り
《たばこ》のみたることありき
あはれただ一人　《い》たきばかりに

何がなしに
さびしくなれば出《で》てあるく　となりて
三月《みつき》にもなれり

やはらかに　れる　に
《ほ》てる頬《ほ》を　《うづ》むるごとき
恋してみたし

かなしきは
《あ》くなき　《りこ》の一念を
てあましたる　にありけり

手も　も
室《へや》いっ　いに　げ出《だ》して
やがて　かに起きかへるかな

百年《ももとせ》の　き眠りの　《さ》めしごと
「　」の「　」に　て「　」　《あくび》してまし
思ふことなしに

《うでく》みて
このごろ思ふ
大《おほ》いなる　《てき》の前に　《をど》り出　《い》でよと

手が白く
《か》っ大《だい》なりき
《ひぼん》なる人といはるる　に　ひしに

こころよく
人を　《ほ》めてみたくなりにけり
《りこ》の心に　《う》めるさびしさ

雨　れば
わが家《いへ》の人　《たれ》も　も　める顔す
雨　《は》れよかし

きより　びおりるごとき心もて
この一生を
るすべなきか

この日
ひそかに　にやどりたる　《くい》あり
われを　はしめ　り

へつらひを　けば
腹　《はらだ》つわがこころ
あまりに我を知るがかなしき

知らぬ家《いへ》たたき起して
《に》げ来《く》るがおもしろかりし
の恋しさ

《ひぼん》なる人のごとくにふるまへる
後《のち》のさびしさは
何《なに》にかたぐへむ

大《おほ》いなる　の　《からだ》が
《にく》かりき
その前にゆきて物を言ふ

には　に　た　るうた人《びと》と
我を見る人に
金　りにけり

遠くより　の　《ね》きこゆ
うなだれてある　《ゆる》やらむ
なみだ流るる

それもよしこれもよしとてある人の
その　がるさを
《ほ》しくなりたり

死ぬことを
《　やく》をのむがごとくにも我はおもへり
心いためば

《みちばた》に犬ながながと　「　」の「　」に　て「　」
《あくび》しぬ
われも　似《まね》しぬ
うらやましさに

になりて　もて犬を　《う》つ
小児《せうに》の顔を
よしと思へり

の
重き　《うな》りのここちよさよ
あはれこのごとく物を言はまし

軽《へうきん》の　《さが》なりし友の死顔の
き　れが
いまも目にあり

の　る人に仕《つか》へて
つくづくと
わが　がいやになりにけるかな

《りよう》のごとくむなしき　に　《をど》り出《い》でて
ゆく
見れば　《あ》かなく

こころよき　れなるかな
もつがず
仕事をしたる後《のち》のこの　れ

《そらねいり》生　「　」の「　」に　て「　」　《なまあ
くび》など
なぜするや
思ふこと人にさとらせぬため

《はしと》めてふっと思ひぬ
やうやくに
のならはしに　れにけるかな

朝はやく
《こんき》を　ぎし　の
恋文《こひ　み》めける文《ふみ》を　めりけり

しっとりと
を吸ひたる海　《かいめん》の
重さに似たる心　《ここち》おぼゆる

死ね死ねと　《おのれ》を　《いか》り
もだしたる
心の　の暗きむなしさ

けものめく顔あり　をあけたてす
とのみ見て　ぬ
人の　るを

と　と
はなればなれの心もて　かに　《むか》ふ
まづきや何《な》ぞ

かの　の
かの　海の　《せんかく》の一人にてありき
死にかねたるは

目の前の　《くわし　ら》などを
かりかりと　《か》みてみたくなりぬ
もどかしきかな

よく　ふ　き　の
死にたらば
すこしはこの　さびしくもなれ

何がなしに
《いき》きれるまで　《か》け出《だ》してみたくなりたり
《くさはら》などを

あたらしき背　など　て
をせむ
しかく今年《ことし》も思ひ　ぎたる

ことさらに燈火《ともしび》を　して
ま　ま　と思ひて　しは
わけもなきこと

の　《りようううんかく》のいただきに
みし日の
き日　《にき》かな

《じんじやう》のおどけならむや
ち死ぬまねをする
その顔その顔

こそこその　がやがて　くなり
ピストル　りて
人生　わる

ありて
のやうにたはむれす
恋ある人のなさぬ　《わ　》かな

とかくして家を出《い》づれば
日　のあたたかさあり
ふかく吸ふ

つかれたる　のよだれは
たらたらと
千　年も　き　るごとし

《みちばた》の　《きりいし》の　に
《く》みて
を見　ぐる　ありたり

何やらむ
《おだや》かならむ目　《めつき》して
《つるはし》を　つ　を見て　る

心より今日《けふ》は　げ　れり
病《やまひ》ある　《けもの》のごとき
げ　れり

おほどかの心来れり
あるくにも
腹に　のたまるがごとし

ただひとり泣かまほしさに
来て　たる
《やどや》の夜　《やぐ》のこころよさかな

友よさは
《こじき》の　《いや》しさ　《いと》ふなかれ
《う》ゑたる　は我も　《しか》りき

しき　のにほひ
《せんぬ》けば
ゑたる腹に　《し》むがかなしも

かなしきは
《のど》のかわきをこらへつつ
夜　《よ　む》の夜　にち　こまる

一度でも我に　を　げさせし
人みな死ねと
いのりてしこと

我に似し友の　人《ふたり》よ
一人は死に
一人は　《らう》を出《い》でて今病《や》む

あまりある　を　《いだ》きて
　のため
おもひわづらふ友をかなしむ

　ち明けて　りて
何か　《そん》をせしごとく思ひて
友とわかれぬ

どんよりと
くもれる　を見て　しに
人を　したくなりにけるかな

人　《ひとなみ》の　《さい》に　ぎ　る
わが友の
　き　もあはれなるかな

《たれ》が見てもとりどころなき　来て
　《　ば》りて帰りぬ
かなしくもあるか

はたらけど
はたらけど猶《なほ》わが生　《くらし》　にならり
　っと手を見る

何もかも　《ゆくする》の事みゆるごとき
このかなしみは
《ぬぐ》ひあへずも

とある日に
　をのみたくてならぬごとく
今日《けふ》われ　《せち》に金《かね》を　《ほ》りせり

《す　しやう》の玉をよろこびもてあそ
わがこの心
何《なに》の心ぞ

事もなく
　《か》つこころよく　《こ》　てゆく
わがこのごろの物　らぬかな

大いなる　の玉を
ひとつ　《ほ》し
それにむかひて物を思はむ

うぬ　《ぼ》るる友に
《あひづち》うちて　ぬ
《ほどこし》をするごとき心に

ある朝のかなしき　のさめぎはに
　に　《い》り来《き》し
《みそ》を　《に》る　《か》よ

こつこつと　《あきち》に　をき　む
　につき来《き》ぬ
家《いへ》に　《い》るまで

何がなしに
　《あたま》のなかに　《がけ》ありて
日　《ひごと》に土のくづるるごとし

遠　《るん　う》に　の　《りん》の　るごとく
今日《けふ》も　る
かなしき日かな

《あか》じみし　《あはせ》の　《　り》よ
かなしくも
ふるさとの　《くるみや》くるにほひす

死にたくてならぬ　あり
はばかりに人目を　《さ》けて
《こは》き顔する

一　の　を見　りて
かなしかり
何《なに》ぞ　等のうれひ　《な》げなる

人《くに》の顔たへがたく　《いや》しげに
目にうつる日なり
家にこもらむ

この　の　日《やすみ》に一日　てみむと
思ひすごしぬ
三年《みとせ》このかた

る　のわれのこころを
きたての
《　ん》に似たりと思ひけるかな

たんたらたらたんたらたらと
雨　《あまだれ》が
むあたまにひびくかなしさ

ある日のこと
室《へや》の　《しやうじ》をはりかへぬ
その日はそれにて心なごみき

かうしては　《を》られずと思ひ
ちにしが
《おもて》に　の　《いなな》きしまで

ぬけして　《らうか》に　ちぬ
あらかに　を　《お》せしに
すぐ　《あ》きしかば

っとして
はた　の　吸ひ
くかわける海　《かいめん》を見る

《たれ》が見ても
われをなつかしくなるごとき
き手　を書きたき　《ゆふべ》

うすみどり
めば　《からだ》が　のごと　《す》きとほるてふ
はなきか

いつも　《にら》む　に　《あ》きて
三日《みか》ばかり
《らふそく》の火にしたしめるかな

人　のつかはぬ言
ひ　っとして
われのみ知れるごとく思ふ日

あたらしき心もとめて
も知らぬ
など今日《けふ》もさまよひて来《き》ぬ

友がみなわれより　らく見ゆる日よ
を　ひ来《き》て
《つま》としたしむ

何《なに》すれば
処《ここ》に我ありや
にかく　《うちおどろ》きて室《へや》を　むる

人ありて　のなかに　《つば》を　《は》く
それにも
心いたまむとしき

夜明けまであそびてくらす　が　《ほ》し
家《いへ》をおもへば
こころ　《つめ》たし

人みなが家《いへ》を　ってふかなしみよ
墓に　《い》るごとく
かへりて眠る

何かひとつ　思　を示し
人みなのおどろくひまに
　むと思ふ

人といふ人のこころに
一人づつ　人《しうじん》が　て
うめくかなしさ

《しか》られて
わっと泣き出《だ》す　心
その心にもなりてみたきかな

　むてふことさへ　《あ》しと思ひ　ぬ
心はかなし
かくれ家《が》もなし

　《はな》たれし女のごときかなしみを
よわき　の
感《かん》ずる日なり

　《にはいし》に
はたと　をなげうてる
　のわれの　《いか》りいとしも

顔あかめ　《いか》りしことが
あくる日は
さほどにもなきをさびしがるかな

いらだてる心よ汝《なれ》はかなしかり
い　い
すこし　「　」の「　」に　て「　」　《あくび》などせむ

女あり
わがいひつけに背《そむ》かじと心を　《くだ》く
見ればかなしも

ふがひなき
わが日《ひ》の本《もと》の女等《をんなら》を
秋雨《あきさめ》の夜《よ》にののしりしかな

　とうまれ　と　《まじ》り
負けてをり
かるがゆゑにや秋が　に　《し》む

わが　《いだ》く思　はすべて
金《かね》なきに　《いん》するごとし
秋の風　く

くだらない小　を書きてよろこべる
　《あは》れなり
初秋《はつあき》の風

秋の風
今日《けふ》よりは　《か》のふやけたる　に
　を　《き》かじと思ふ

はても見　ぬ
　《ますぐ》の　をあゆむごとき
こころを今日は　ち　たるかな

何事も思ふことなく
いそがしく
　らせし一日《ひとひ》を忘れじと思ふ

何事も金金《かねかね》とわらひ
すこし　《へ》て
またも　《には》かに　つのり来《く》

　《た》そ我《われ》に
ピストルにても　《う》てよかし
　のごとく死にて見せなむ

やとばかり
　《かつら》首相に手とられし　みて　《さ》めぬ
秋の夜の

病《やまひ》のごと
思　《しきやう》のこころ　《わ》く日なり
目にあをぞらの　《けむり》かなしも

《おの》が　をほのかに　びて
せし
十四《じふし》の　にかへる　《すべ》なし

に　ゆく
さびしくも　ゆく
われにし似るか

かの　の　の　《しやしやう》が
ゆくりなくも
我が中学の友なりしかな

ほとばしる　《　》の　の
心　《ここち》よさよ
しばしは　きこころもて見る

も友も知らで　《せ》めにき
《なぞ》に似る
わが学　のおこたりの　《もと》

室の　より　《に》げて
ただ一人
かの　《しろあと》に　に　きしかな

来　《こずかた》のお　の　に　ころびて
に吸はれし
十五《じふご》の心

かなしみといはばいふべき
物の　《あ　》
我の　《な》めしはあまりに　かり

れし　《あふ》げばいつも
を　きたくなりて
きてあそびき

夜　ても　きぬ
は
十五の我の歌にしありけり

よく　《しか》る　ありき
《ひげ》の似たるより山　《やぎ》と　づけて
似もしき

われと　《とも》に
小に　を　げて
後　大　《こうびたい　》の　もありしかな

《しろあと》の
に　《こしか》け
の木《こ》の　《み》をひとり　《あ　は》ひしこと

その後《のち》に我を　てし友も
あの　は　に書　《ふみよ》み
ともに　びき

学　の　書　《としよぐら》の　の秋の
《き》なる　きし
今も　知らず

れば
《ま》づ人さきに白の　《ふくき》て家出《いへい》づる
我にてありしか

今は亡き　の恋人のおとうとと
なかよくせしを
かなしと思ふ

夏　み　《は》ててそのまま
かへり来《こ》ぬ
き　の　もありき

スト　思ひ出《い》でても
今は　《は》や　が　《おど》らず
ひそかに　《さび》し

《もりをか》の中学　の
《ル　》の
《てすり》に最一度《もいちど》我を　《よ》らしめ

りと言ひ　る友を
《と》きふせし
かの　《みちばた》の　《くり》の　《き》の　《もと》

風に
大　《うちまるおほ　》の　の
かさこそ　るを　《ふ》みてあそびき

そのかみの愛　の書《しよ》よ
大　《おほかた》は
今は流　《はや》らずなりにけるかな

ひとつ
をくだるがごとくにも
我けふの日に　り　きたる

《うれ》ひある少年《せふねん》の　に　《うらや》みき
小　の　を
びてうたふを

《ふわけ》せし
《みみず》のいのちもかなしかり
かの　の木　《もくさく》の　《もと》

かぎりなき知　の　《よく》に　ゆる　を
は　《いた》みき
人恋ふるかと

《そほう》の書《しよ》を我に　《すす》めし友　く
《かう》を　《しりぞ》きぬ
まづしさのため

おどけたる手つきをかしと
我のみはいつも　ひき
学の　を

《し》が　《さい》に　をあやまちし人のこと
かたりきかせし
もありしかな

そのかみの学　一のなまけ者
今は　目《まじめ》に
はたらきて　《を》り

田　《なか》めく　の　を
三日《みか》ばかり　に　《さら》し
かへる友かな

島《ばらじま》の　の　木の　を
われと　きし少女《をとめ》
《さい》をたのみき

を病みて　き　《めがね》をかけし
その　よ
一人泣くをおぼ　し

わがこころ
けふもひそかに泣かむとす
友みな　《おの》が　をあゆめり

《さき》んじて恋のあまさと
かなしさを知りし我なり
んじて　《お》ゆ

興来《きようきた》れば
友なみだ　《た》れ手を　《ふ》りて
《ゐひどれ》のごとくなりて　りき

人ごみの中をわけ来《く》る
わが友の
むかしながらの　《ふと》き杖《つゑ》かな

見よげなる年　の文《ふみ》を書く人と
おもひ　ぎにき
三年《みとせ》ばかりは

さめてふっと　しむ
わが眠り
　のごとく　からぬかな

そのむかし　《しうさい》の　の　かりし
友　《らう》にあり
秋のかぜ　く

《ちかめ》にて
おどけし歌をよみ出《い》でし
　《しげを》の恋もかなしかりしか

わが　のむかしの　ひ
　のことにかかりき
今はうたはず

友はみな　日四　《あるひしはう》に　り　《ゆ》きぬ
その後八年《のちやとせ》
　《なあ》げしもなし

わが恋を
はじめて友にうち明けし夜《よる》のことなど
思ひ出《い》づる日

　れし　《たこ》のごとくに
　き日の心かろくも
とびさりしかな

ふるさとの　《なまり》なつかし
　《ていしやば》の人ごみの中に
そを　《き》きにゆく

やまひある　《けもの》のごとき
わがこころ
ふるさとのこと　けばおとなし

ふと思ふ
ふるさとに　て日　《ひごとき》きし　《すずめ》の　くを
三年《みとせ》　か　り

亡《な》くなれる　がその
たまひたる
　の本など　りいでて見る

その
小学　の　《まさやね》に我　げし　《まり》
いかにかなりけむ

ふるさとの
かの　《みちばた》のすて　よ
今年も　に　《うづ》もれしらむ

わかれをれば　《いもと》いとしも
　き　《を》の
　《げた》など　《ほ》しとわめく　なりし

日《ふつか》前に山の　《ゑ》見しが
今朝《けさ》になりて
にはかに恋しふるさとの山

《あめうり》の　ル　《き》けば
うしなひし
をさなき心ひろへるごとし

このごろは
母も　《ときどき》ふるさとのことを言ひ出　《い》づ
秋に　《い》れるなり

それとなく
　《くに》のことなど　り出《い》でて
秋の夜《よ》に　く　《もち》のにほひかな

かにかくに
おもひでの山　　《し　たみむら》は恋しかり
おもひでの

田も　《はた》も　りて　のみ
ほろびゆくふるさと人《びと》に
心　する日

あはれかの我の　へし
　等《こら》もまた
やがてふるさとを　《す》てて出《い》づるらむ

ふるさとを出《い》で来《き》し　等の
相　《あいあ》ひて
よろこ　にまさるかなしみはなし

　をもて　はるるごとく
ふるさとを出《い》でしかなしみ
　ゆる　なし

やはらかに　あをめる
　《きたかみ》の　　《きしべ》目に見ゆ
泣けとごとくに

ふるさとの
　《そんい》の　のつつましき　　《くしまき》などもの
なつかしきかな

かの　の　　《とうきしよ》に来て
　病《はいや》みて
　もなく死にし　もありき

小学の首　を我と　《あらそ》ひし
友のいとなむ
木　《きちんやど》かな

千　　等《ちよ　ら》も　《ちやう》じて恋し
　を　《あ》げぬ
わが　にしてなせしごとくに

ある年の　《ぼん》の　に
　《きぬか》さむ　れと言ひし
女を思ふ

うすのろの　と
　《かたは》の父もてる三　《さんた》はかなし
夜《よる》も書　《ふみよ》む

我と　に
　《くりげ》の　《こうま》らせし
母の　き　の　癖《ぬすみぐせ》かな

大　《おほがた》の　《ひふ》の　の　き
今も目に見ゆ
　《むつ》の日の恋

その　さへ忘られし
飄然《へうぜん》とふるさとに来て
咳《せき》せし

　《い　わる》の大　の　などもかなしかり
《いくさ》に出《い》でしが
生きてかへらず

　を病む
　《ごくだう　ぬし》の　《そうりやう》の
よめとりの日の　の　《らい》かな

　郎《そうじろ》に
おかねが泣きて　《くど》き　《を》り
大　《だいこん》の　白きゆふぐれ

小心《せうしん》の　の書　の
　の　《ふ》れし　《うはさ》に　てる
ふるさとの秋

わが　　《いとこ》
　山の　《かり》に　《あ》きし後《のち》
　のみ家《いへ》　り病《や》みて死にしかな

我ゆきて手をとれば
泣きてしづまりき
　《ゐ》ひて　《あば》れしそのかみの友

のめば
《かたな》をぬきて　を　《お》ふ　《けうし》もありき
を遂《お》はれき

年ごとに　病《はいびやう》やみの　《ふ》　てゆく
に　へし
き　者かな

ほたる　《がり》
にゆかむといふ我を
山　《やま　》にさそふ人にてありき

《ばれいしよ》のうす　の　に　《ふ》る
雨を思へり
《みやこ》の雨に

あはれ我が　ス　ル　は
金《きん》のごと
心に　れり　くしみらに

友として　ものなき
《しやうわる》の　の　等《こら》も
あはれなりけり

《かんこどり》
く日となれば起《おこ》るてふ
友のやまひのいかになりけむ

わが思ふこと
おほかたは　《ただ》しかり
ふるさとのたより　《つ》ける朝《あした》は

今日　けば
かの　《さち》うすきやもめ人《びと》
きたなき恋に　を　《い》るるてふ

わがために
なやめる　《たま》をしづめよと
歌うたふ人ありしかな

あはれかの　のごときたましひよ
今は何処《いづこ》に
何を思ふや

わが　の白き　《つつじ》を
月《うすづき》の夜《よ》に
《を》りゆきしことな忘れそ

わが　に
初めて　ス　ストの　を　《と》きたる
き女かな

ふかき　《かうま》の　《はら》の
の
朝の虫こそすずろなりけれ

の
はるかに　にふるさとの山見　来《く》れば
《り》を　《ただ》すも

ふるさとの土をわが　めば
何がなしに　軽《かろ》くなり
心重《おも》れり

ふるさとに　りて　《ま》づ心　《いた》むかな
くなり
もあたらし

見もしらぬ女　《をんなけうし》が
そのかみの
わが学　《まなびや》の　に　てるかな

かの家《いへ》のかの　にこそ
の夜《よ》を
《ひでこ》とともに　《かはづき》きけれ

そのかみの　《しんどう》の　の
かなしさよ
ふるさとに来て泣くはそのこと

ふるさとの　　《ていしやばみち》の
　ばたの
《くるみ》の　に小　　《ひろ》へり

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

　秋風のこころよさに

ふるさとの　遠《とほ》みかも
《たか》き　《や》にひとりのぼりて
《うれ》ひて　《くだ》る

《かう》として玉をあ　むく小人《せうじん》も
秋来《あきく》といふに
物を思へり

かなしきは
秋風ぞかし
《まれ》にのみ　《わ》きし　の　《しじ》に流るる

に　《す》く
かなしみの玉に　《まくら》して
　のひびきを夜もすがら　《き》く

　《さ》びし七山《ななやま》の
火のごとく　めて日　《い》りぬ
　かなるかな

そを　めば
　《うれ》ひ知るといふ書　《ふみた》ける
いにしへ人《びと》の心よろしも

ものなべてうらはかなげに
　れゆきぬ
とりあつめたる　しみの日は

　《みづたまり》
れゆく　とくれな　の　《ひも》を　べぬ
秋雨《あきさめ》の後《のち》

秋　つは　にかも似る
《あら》はれて
思ひことごと　しくなる

　《うれ》ひ来て
　にのぼれば
　も知らぬ　《ついば》めり　き　《ばら》の　《み》

秋の　《つじ》
四《よ》す　の　《みち》の三す　へと　きゆく風の
あと見　ずかも

秋の　まづいち　く　に　《い》る
かかる　《さが》　つ
かなしむべかり

目になれし山にはあれど
秋来《く》れば
　や　まむとかしこみて見る

わが　《な》さむこと　に　《つ》きて
　き日を
かくしもあはれ物を思ふか

さららさらと雨落ち来《きた》り
　の　《も》の　《ぬ》れゆくを見て
　わすれぬ

ふるさとの　の　　《みらう》に
　《ふ》みにける
小　《をぐし》の　《てふ》を　にみしかな

こころみに
いとけなき日の我となり
物言ひてみむ人あれと思ふ

はたはたと　《きび》の　れる
ふるさとの　《のきば》なつかし
秋風　けば

《す》れあへる　のひまより
はつかにも見きといふさへ
日　《にき》に　れり

風流　《みやびを》は今も　も
《あわゆき》の
玉手　《たまで》さし　《ま》く夜《よ》にし　《お》ゆらし

かりそめに忘れても見まし
だたみ
生《お》ふる　に　《うも》るるがごと

その　《ゆりかご》に　て
あまたたび　にみし人か
《せち》になつかし

月《かみなづき》
手《いはて》の山の
初　の　《まゆ》にせまりし朝を思ひぬ

ひでり雨さらさら落ちて
前　《せん　い》の
《はぎ》のすこしく　《みだ》れたるかな

秋の　《くわくれう》として影もなし
あまりにさびし
《からす》など　べ

雨後《うご》の月
ほどよく　《ぬ》れし　《やねがはら》の
そのところどころ　るかなしさ

われ　《う》ゑてある日に
細き　を　《ふ》りて
ゑて我を見る犬の　《つら》よし

いつしかに
泣くといふこと忘れたる
我泣かしむる人のあらじか

然《わうぜん》として
ああ　のかなしみぞ我に来《きた》れる
ちて　《ま》ひなむ

「」の「文」に　て「」　《いとどな》く
そのかたはらの　に《きよ》し
泣き　ひしてひとり物言ふ

なく病《や》みし　《ころ》より
すこし　《あ》きて眠《ねむ》るが
癖《くせ》となりにき

人ひとり　《う》るに　ぎ　る事をもて
大　《たいぐわん》とせし
きあやまち

物　《ゑ》ずる
そのやはらかき　目《うはめ》をば
愛《め》づることさらつれなくせむや

かくばかり　《あつ》き　は
初恋の日にもありきと
泣く日またなし

く　く忘れし友に
ふごとき
よろこびをもて　の　《き》く

秋の夜の
《はがね》の　の大　に
火を　《は》く山もあれなど思ふ

手山《いはてやま》
秋はふもとの三　《さん　う》の
に　つる虫を何《なに》と　くらむ

父のごと秋はいかめし
母のごと秋はなつかし
家《いへ》　たぬ児《こ》に

秋来《く》れば
恋《こ》ふる心のいとまなさよ
夜《よ》もい　《ね》がてに　《かり》多く　く

　月《ながつき》も　《なか》ばになりぬ
いつまでか
かくも　く　出《うちい》でずあらむ

思ふてふこと言はぬ人の
おくり来《き》し
忘れな　《ぐさ》もいちじろかりし

秋の雨に　《さかぞ》りやすき　《ゆみ》のごと
このごろ
君のしたしまぬかな

　の風夜　《よひる》ひびきぬ
人　《と》はぬ山の　《ほこら》の
　《いしうま》の　に

ほのかなる　木《くちき》の　《かを》り
そがなかの　《たけ》の　りに
秋やや　し

　雨《しぐれ》　るごとき　して
木　《こづた》ひぬ
人によく似し　の　《さる》ども

　の
遠きひびきす
木《き》のうろに　《うす》ひく　《しゆじゆ》の　にかも来《き》し

　のはじめ
まづ　ありて
《はんしん》の人そが中に火や　りけむ

はてもなく砂うちつづく
　壁《　》の　に　みたまふ　は
秋の　かも

あめつちに
わが　しみと月　《げつくわう》と
あまねき秋の夜《よ》となれりけり

うらがなしき
夜《よる》の物の　《ねも》れ来《く》るを
　《ひろ》ふがごとくさまよひ　《ゆ》きぬ

　の　の
ふるさとに来《き》て眠るがに
げに　かにも　の来《き》しかな

忘れがたき人人

一

《しほ》かをる　の　《はまべ》の
砂山のかの　《はまなす》よ
今年も　けるや

たのみつる年の　さを　《かぞ》へみて
指を見つめて
　がいやになりき

三度《みたび》ほど
　の　よりながめたる　の　なども
したしかりけり

函館《はこだて》の　《とこや》の　《でし》を
おもひ出《い》でぬ
　《そ》らせるがこころよかりし

わがあとを　ひ来《き》て
知れる人もなき
　土《へんど》に　みし母と　かな

　に　《る》ひてやさしくなれる
いもうとの　《め》見ゆ
　軽《つがる》の海を思へば

目を　て
　心《しやうしん》の　を　《ず》して　し
友の手　のおどけ　しも

をさなき
　の　《らんかん》に　《くそぬ》りし
　も友はかなしみてしき

おそらくは生　《しやうがい》　をむかへじと
わらひし友よ
今もめとらず

あはれかの
　《めがね》の　《ふち》をさびしげに　らせて　し
女　よ

友われに　《めし》を　へき
その友に背《そむ》きし我の
　《さが》のかなしさ

函館《はこだて》の　《あをやなぎちやう》こそかなしけれ
友の恋歌《こひうた》
　ぐるまの

ふるさとの
　のかをりを　《なつ》かしむ
女の　《まゆ》にこころひかれき

あたらしき　書の　の
　《か》をかぎて
一　《いちづ》に金《かね》を　《ほ》しと思ひしが

しらなみの　せて　《さわ》げる
函館の大　《おほもりはま》に
思ひしことども

朝な朝な
　《しな》の　歌《ぞくか》をうたひ出づる
まくら　を愛《め》でしかなしみ

　《へうはく》の　《うれ》ひを　《じよ》して　《な》ら　りし
　稿《さうかう》の字の
　みがたさかな

いくたびか死なむとしては
死な　りし
わが来《こ》しかたのをかしく　し

函館の　《ぐわぎう》の山《やま》の　腹《はん　く》の
　《ひ》の　《からうた》も
なかば忘れぬ

むやむやと
　の中《うち》にてたふとげの事を　《つ　や》く
　《こじき》もありき

とるに　らぬ　と思へと言ふごとく
山に　《い》りにき
　のごとき友

　《まきたばこ》　にくはへて
《なみ》あらき
磯《いそ》の夜　に　ちし女よ

　のひまにわ　わ
　に　りて
　《と》ひ来《き》し友とのめる　かな

大　《おほかは》の　の　《おもて》を見るごとに
郁雨《いくう》よ
君のなやみを思ふ

《ちる》とその　き　《じひ》とを
もちあぐみ
《な》すこともなく友は　べり

こころ　し　《　》ぬ人人の
あつまりて　のむ　が
我が家なりしかな

かなしめば　く　ひき
をもて
《もん》を　《げ》すといふ年　の友

くして
人《すにん》の父となりし友
なきがごとく　《る》へばうたひき

さりげなき　き　ひが
とともに
我が　《はらわた》に　《し》みにけらしな

「」の「」に　て「」　《あくびか》み
夜　の　に　れたる
れが今は物　《ものた》らぬかな

雨に　れし夜　の　に
《うつ》りたる
山　《やまあひ》の　のともしびの

雨つよく　る夜の　の
た　まなく　《しづく》流るる
《まど　ス》かな

夜中の
知　《くちあん　き》に　《お》りゆきし
女の　《びん》の　き　《きず》あと

《さつ　ろ》に
かの秋われの　てゆきし
しかして今も　てるかなしみ

の　「」の「夏」に　て「」《なみき》に　に
秋の風
くがかなしと日　《にき》に　れり

しんとして　き　《まち》の
秋の夜の
玉　《たうもろこし》の　くるにほひよ

わが　の　と　《いもと》のいさかひに
初夜《しよや》　ぎゆきし
の雨

《いしかり》の　《びくに》といへる　の
《さく》に《ほ》してありし
い　《きれ》かな

かなしきは小《をたる》の　よ
歌ふことなき人人の
の　さよ

泣くがごと音ふるはせて
手の相《さう》を見せよといひし
者《　きしや》もありき

いささかの　《ぜにか》りてゆきし
わが友の
後　《うしろすがた》の　《かた》の　かな

わたりの　《つたな》きことを
ひそかにも
《ほこ》りとしたる我にやはあらぬ

汝　《な》が　《や》せしからだはすべて
《むほんぎ》のかたまりなりと
いはれてしこと

かの年のかの　の
初　の　事を書きしは
我なりしかな

《いす》をもて我を　《う》たむと　　《みがま》へし
かの友の　《る》ひも
今は　《さ》めつらむ

負けたるも我にてありき
あらそひの　《もと》も我なりしと
今は思へり

《なぐ》らむといふに
れとつめよせし
の我のいとほしきかな

汝三度《なれみたび》
この　《のど》に《けん》を　《ぎ》したりと
《かれこくべつ》の《じ》に言へりけり

あらそひて
いたく《にく》みて　れたる
友をなつかしく思ふ日も来《き》ぬ

あはれかの　《まゆ》の　《ひい》でし少年よ
と　べば
はつかに　《る》みしが

わが　に　物　《ぬ》はせし友ありし
く来《く》る
かな

手《ひらて》もて
《ふ　き》にぬれし顔を　《ふ》く
友　を　とせりけり

のめば　《おに》のごとくに　かりし
大いなる顔よ
かなしき顔よ

《からふと》に　《い》りて
しき　を　《はじ》めむといふ
友なりしかな

治《をさ》まれる　の事　《ことな》さに
《あ》きたりといひし　こそ
かなしかりけれ

同の　　き
《まう》けむといふ友なりき
《さぎ》せしといふ

あをじろき頬《ほほ》に　を　らせて
死をば　りき
き　人《あきびと》

を負《お》ひて
の　き　《い》る　に
われ見　りし　の　《まゆ》かな

として　みし友と
やや　く手をば握《にぎ》りき
わかれといふに

ゆるぎ出《い》づる　の　より
人　《ひとさき》に顔を　きしも
負《ま》け　らむため

みぞれ　る
《いしかり》の　の　に　みし
ル　の物　かな

わが　れる後《のち》の《うはさ》を
おもひやる　出《たびで》はかなし
死ににゆくごと

わかれ来《き》てふと　《またた》けば
ゆくりなく
つめたきものの頬をつたへり

忘れ来《き》し　《たばこ》を思ふ
ゆけどゆけど
山なほ遠き　の　の

うす《あか》く に流れて
日影《いりひかげ》
《あらの》の の を 《てら》せり

腹すこし 《いた》み出《い》でしを
しのびつつ
《ちやうろ》の にのむ 《たばこ》かな

《のりあひ》の 士 《はうへいしくわん》の
の 《さや》
がち りと るに思ひや れき

のみ知りて 《ん》もゆかりもなき土 の
《やどや》 けし
我が家《いへ》のごと

《つれ》なりしかの 士の
あける き 顔《ねがほ》を
かなしと思ひき

今夜こそ思ふ 《ぞん ん》泣いてみむと
《とま》りし の
のぬるさかな

の に のごと 《い》てしを 《そ》むる
あかつきの

ごおと る 《こがらし》のあと
《かわ》きたる ひ ちて
を 《つつ》めり

知 《そらちがは》 に 《うも》れて
も見 ず
《きしべ》の に人ひとり き

《せきばく》を とし友とし
のなかに
き一生を る人もあり

いたく に れて猶《なほ》も
きれぎれに思ふは
我のいとしさなりき

うたふごと の びし
《にうわ》なる
き 《きふ》の をも忘れず

のなか
処処《しよしよ》に 見 て
《んとつ》の 《けむり》うすくも にまよへり

遠くより
《ふ》ながながとひびかせて
今とある に《い》る

何事も思ふことなく
日一日《ひいちにち》
のひびきに心まかせぬ

さいはての に 《お》り ち
あかり
さびしき にあゆみ 《い》りにき

しらしらと かがやき
千 なく
《くしろ》の海の の月かな

こほりたる の 《びん》を
火に 《か》し
ながれぬともしびの 《もと》

顔ところ
それのみ に ら る友にも ひき
の 《はて》にて

あはれかの のはてにて
のみき
かなしみの 《をり》を 《すす》るごとくに

のめば　しみ一　に　《わ》き来《く》るを
《ね》て　みぬを
うれしとはせし

出《だ》しぬけの女の　ひ
に　《し》みき
《くりや》に　の　《こほ》る　夜中

わが　《る》ひに心いためて
うたは　る女ありしが
いかになれるや

小　《こやつこ》といひし女の
やはらかき
《みみたぼ》なども忘れがたかり

よりそひて
夜《しんや》の　の中に　つ
女の　手《めて》のあたたかさかな

死にたくはないかと言へば
これ見よと
《のんど》の　《きず》を見せし女かな

事《げいごと》も顔も
かれより　《すぐ》れたる
女あし　まに我を言へりとか

《ま》へといへば　ちて　ひにき
おのづから
《あくしゆ》の　《る》ひにたふるるまでも

死ぬばかり我が　《る》ふをまちて
いろいろの
かなしきことを　《ささや》きし人

いかにせしと言へば
あをじろき　《る》ひ　めの
《おもて》に　《し》ひて　《る》みをつくりき

かなしきは
かの白玉《しらたま》のごとくなる　に　せし
スの　《あと》かな

《る》ひてわがうつむく　も
ほしと　《め》ひらく　も
びし　なりけり

火をしたふ虫のごとくに
ともしびの明るき家《いへ》に
かよひ　《な》れにき

きしきしと　さに　めば　《いたきし》む
かへりの　の
のくちづけ

その　《ひ　》に　《まくら》しつつも
我がこころ
思ひしはみな我のことなり

さらさらと　の　《くづ》が
に　る
磯の月夜のゆきかへりかな

死にしとかこのごろ　きぬ
恋がたき
《さい》あまりある　なりしが

十年《とせ》まへに作りしといふ　《からうた》を
《る》へば　《とな》へき
に　《お》いし友

吸ふごとに
が　たりと　《こほ》りつく
き　を吸ひたくなりぬ

もなき　月の　《わん》に
白　《しろぬり》の
が　く　かべり

三　《さみせん》の　《いと》のきれしを
火事のごと　ぐ　ありき
大　の夜《よ》に

のごと
遠く　をあらはせる
《あかん》の山の　のあけぼの

《くに》に　て
げせしことありといふ
女の三　《さみ》にうたへるゆふべ

《　びいろ》の
き手　にのこりたる
かの　《あひびき》の　と処かな

よごれたる　《たびは》く　の
《きみ》わるき思ひに似たる
思出《おもひで》もあり

わが室《へや》に女泣きしを
小　のなかの事かと
おもひ出《い》づる日

《らうとうさ》
ながくも　をふるはせて
うたふがごとき　なりしかな

いつなりけむ
にふと　《き》きてうれしかりし
その　もあはれ　く　か　り

頬《ほ》の　き
流　《りうり》の　の人として
《みちと》ふほどのこと言ひしのみ

さりげなく言ひし言　は
さりげなく君も　きつらむ
それだけのこと

ひややかに　き大　《なめいし》に
の日の　かに　るは
かかる思ひならむ

の中の明るさのみを吸ふごとき
き　《ひとみ》の
今も目にあり

かの　に言ひそびれたる
大　の言　は今も
にのこれど

白《ましろ》なる　の　《かさ》の
《きず》のごと
流　の　しがたきかな

函館《はこだて》のかの　《やけあと》を　りし夜《よ》の
こころ　りを
今も　しつ

人がいふ
《びん》のほつれのめでたさを
物書く　の君に見たりし

《ばれいしよ》の　く　と
なれりけり
君もこの　を　きたまふらむ

山の　の
山を思ふがごとくにも
かなしき　は君を思へり

忘れをれば
ひ　っとした事が思ひ出の　《たね》にまたなる
忘れかねつも

病《や》むと　き
《い》　しと　きて
四百　《しひやくり》のこなたに我はうつつなかりし

君に似し　を　《まち》に見る　の
こころ　《をど》りを
あはれと思へ

かの　を最一度　《もいちどき》かば
すっきりと
　や　《は》れむと今朝《けさ》も思へる

いそがしき生　《くらし》のなかの
　《ときおり》のこの物おもひ
　《たれ》のためぞも

しみじみと
物うち　る友もあれ
君のことなど　り出《い》でなむ

死ぬまでに一度　はむと
言ひやらば
君もかすかにうなづくらむか

　として
君を思へば
　かりし心にはかに　ぐかなしさ

わかれ来《き》て年《とし》を重ねて
年《とし》ごとに恋しくなれる
君にしあるかな

　《いしかり》の　《みやこ》の　の
君が家
　《りんご》の　の　りてやあらむ

　き文《ふみ》
三年《みとせ》のうちに三度《みたび》来《き》ぬ
我の書きしは四度《よたび》にかあらむ

手　を　ぐ

手　《て　くろ》を　《ぬ》ぐ手ふと　《や》む
何やらむ
こころかすめし思ひ出のあり

いつしかに
　《じやう》をいつはること知りぬ
　《ひげ》を　てしもその　なりけむ

朝の　の
　《ゆ　ね》のふちにうなじ　《の》せ
ゆるく　《いき》する物思ひかな

夏来《く》れば
うがひ　の
病《やまひ》ある　に　《し》む朝のうれしかりけり

つくづくと手をながめつつ
おもひ出《い》でぬ
　スが　手《じやうず》の女なりしが

さびしきは
　にしたしまぬ目のゆゑと
　き　など　はせけるかな

　しき本を　ひ来て　む夜　《よは》の
そのたのしさも
　くわすれぬ

　七日《たびなのか》
かへり来《き》ぬれば
わが　の　き　の　《し》みもなつかし

　文書《こもんじよ》のなかに見いでし
よごれたる
吸　《すひとりがみ》をなつかしむかな

手にためし　の　《と》くるが
ここちよく
わが　《ねあ》きたる心には　《し》む

れゆく　《しやうじ》の日影《ひかげ》
そを見つつ
こころいつしか暗くなりゆく

ひやひやと
夜は　の　《か》のにほふ
者が　みたるあとの家《いへ》かな

《まど　ス》
《ちり》と雨とに　《くも》りたる　にも
かなしみはあり

年《むとせ》ほど日　日　《ひごとひごと》にか　りたる
き　も
《す》てられぬかな

こころよく
のねむりをむさぼれる
目にやはらかき　の　かな

《あかれんぐわ》遠くつづける　《たかべい》の
むらさきに見　て
の日ながし

の
の　の三　の　《づくり》に
やはらかに　る

よごれたる　の壁に
りて　《と》け　りては　くる
の　かな

目を病《や》める
き女の　《よ》りかかる
にしめやかに　の雨　る

あたらしき木のかをりなど
ただよへる
《しんかいまち》の　の　けさ

の　《まち》
見よげに書ける女　《をんなな》の
《かどふだ》などを　みありくかな

そことなく
《みかん》の　の　くるごときにほひ　りて
《ゆふべ》となりぬ

にぎはしき　き女の集　《あつまり》の
こゑ　《き》き　《う》みて
さびしくなりたり

何処《どこ》やらに
き女の死ぬごとき　《なや》ましさあり
の　《みぞれ》　る

やはらかき　の　《ゑ》ひのあとなる
このかなしみのすずろなるかな

白き　《さら》
《ふ》きては　《たな》に重《かさ》ね　る
の　《すみ》のかなしき女

きたる　の大　《おほ　》の
何処《いづく》やらむ
《せきたんさん》のにほひひそめり

《あかあか》と　日《いりひ》うつれる
ばたの　の　の
白き顔かな

しき　の　《さら》の
《す》のかをり
こころに　《し》みてかなしき　《ゆふべ》

《そらいろ》の　より
山　《やぎ》の　をつぐ
手のふるひなどいとしかりけり

すがた見の
《いき》のくもりに　されたる
《る》ひうるみの　《まみ》のかなしさ

ひとしきり　かになれる
ゆふぐれの
《くりや》にのこる　のにほひかな

ひややかに　《びん》のならべる　の前
《は》せる女を
かなしとも見き

やや　き　スを　《かは》して　れ来《き》し
夜の　の
遠き火事かな

病　の　のゆふべの
ほの白《じろ》き顔にありたる
《あは》き見　《みおぼ》

何　《いつ》なりしか
かの大　《おほかわ》の　《いうせん》に
《ま》ひし女をおもひ出《で》にけり

もなき文《ふみ》など　く書きさして
ふと人こひし
に出《で》てゆく

しめらへる　《たばこ》を吸へば
おほよその
わが思ふことも軽《かろ》くしめれり

するどくも
夏の来《きた》るを感じつつ
雨後《うご》の小　《こには》の土の　《か》を　《か》ぐ

すずしげに　《か　》り　てたる
《　スや》の前にながめし
夏の夜の月

君来るといふに　《と》く起き
白　の
《そで》のよごれを　にする日かな

おちつかぬ我が　の
このごろの
のうるみなどかなしかりけり

どこやらに　《くひ》　つ　し
大　《おほをけ》をころがす　し
ふりいでぬ

人　《ひとけ》なき夜《よ》の事　室に
けたたましく
の　《りん》の　りて　みたり

目さまして
ややありて　に　《い》り来《きた》る
夜中すぎの　かな

見てをれば　とまれり
吸はるるごと
心はまたもさびしさに　《ゆ》く

朝朝《あさあさ》の
うがひの料《しろ》の　《す　やく》の
《びん》がつめたき秋となりにけり

《なだら》かに　の　める
の　の
小　《こみち》に　き小　《をぐし》ひろへり

山の　生《すぎふ》のなかに
《まだら》なる日影這《ひかげは》ひ　《い》る
秋のひるすぎ

とろろと　きて　を　く　《とび》を　《あつ》せる
《しほ》ぐもりかな

小　日《こはるび》の　《くもり　ス》にうつりたる
影《とりかげ》を見て
すずろに思ふ

ひとならび　げるごとき
家家《いへいへ》の　《たかひく》の　《のき》に
の日の　ふ

京　の　山　《たきやまちやう》の
《ひ》ともる　のいそがしさかな

よく　《いか》る人にてありしわが父の
日ごろ　《いか》らず
れと思ふ

あさ風が　のなかに　き　《い》れし
《やなぎ》のひと
手にとりて見る

ゆゑもなく海が見たくて
海に来ぬ
こころ　《いた》みてたへがたき日に

たひらなる海につかれて
そむけたる
目をかきみだす　き　《おび》かな

今日　《あ》ひし　の女の
どれもどれも
恋いにや　れて帰るごとき日

の
とある　中《のなか》の　の
夏　の　《か》のなつかしかりき

朝まだき
やっと　《ま》に　《あ》ひし初秋《はつあき》の　出《たびで》の　の
《かた》き　《ん》かな

かの　の夜　の　に
おもひたる
我がゆくすゑのかなしかりしかな

ふと見れば
とある　の　の　とまれ
雨の夜《よ》の

わかれ来《き》て
燈火小暗《あかりをぐら》き夜の　の　に　《もてあそ》
き　《りんご》よ

いつも来《く》る
この　肆《さかみせ》のかなしさよ
ゆふ日　《あかあか》と　に　《さ》し　《い》る

白き　《はすぬま》に　くごとく
かなしみが
《ゑ》ひのあひだにはっきりと　く

壁《かべ》ごしに
き女の泣くをきく
の　の秋の　《かや》かな

りいでし　年《こぞ》の　《あはせ》の
なつかしきにほひ　に　《し》む
初秋《はつあき》の朝

にしたる　の　《ひ　》の　みなど
いつか　《なほ》りて
秋の風　く

り　りて
手　《てあか》きたなき　の　書のみ　る
夏の　かな

ゆゑもなく　《にく》みし友と
いつしかに　しくなりて
秋の　れゆく

《あかがみ》の　　手　《てず》れし
《こくきん》の
書《ふみ》を　《かうり》の　にさがす日

ることを　し　《と》められし
本の著者に
《みち》にて　へる秋の朝かな

今日よりは
我も　など　《あふ》らむと思へる日より
秋の風　く

大海《たいかい》の
その　《かたすみ》につらなれる島島《しまじま》の　に
秋の風　く

うるみたる目と
目の　の　《ほくろ》のみ
いつも目につく友の　かな

いつ見ても
　の玉をころがして
《くつした》を《あ》む女なりしが

《　びいろ》の
《ながいす》の　に眠りたる　ほの白《じろ》き
秋のゆふぐれ

ほそぼそと
　処《そこ》ら　処《ここ》らに虫の　く
　の　に来て　む手　かな

夜《よる》おそく　を　《く》りをれば
白きもの　を　れり
犬にやあらむ

夜の　の　の　《　ス》を
うす　《あか》く
　めて　なき火事の　かな

あはれなる恋かなと
ひとり　《つ　や》きて
夜　《よは》の火　《ひをけ》に　　《すみそ》へにけり

白《ましろ》なる　　の　《かさ》に
手をあてて
　き夜にする物思ひかな

　のごと
　《からだ》をひたすかなしみに
《ねぎ》の　《か》などのまじれる　《ゆふべ》

　ありて
　のまねなどして　ふ
三十　《みそ　》の友のひとり　《ず》みかな

《きよわ》なる　　《せきこう》のごとく
おそれつつ
　夜の　を一人　歩す

《ひふ》がみな　にてありき
しんとして眠れる　《まち》の
重き

夜《よる》おそく　　に　《い》り
　ち　《すわ》り
やがて出《い》でゆきぬ　《ぼう》なき

　がつけば
しっとりと夜　　《お》りて　《を》り
ながくも　をさまよへるかな

《も》しあらば　　《たばこめぐ》めと
　りて来《く》る
あとなし人《びと》と　夜に　る

《あらの》より帰るごとくに
帰り来《き》ぬ
東京の夜《よ》をひとりあゆみて

の　の　なる
《しきいし》の　《しも》にこぼれし
かな

ち　んち　んと
とある小　《や　》に頬白《ほほじろ》の　を　む
の　《や》の　《みち》

十月の朝の　に
あたらしく
吸《す》ひそめし　《あかんぼ》のあり

十月の　病　の
しめりたる
き　のゆきかへりかな

むらさきの　《そでた》れて
を見　げ　る　《しな》人ありき
の　後

児《をさなご》の手　はりのごとき
思ひあり
に来てひとり歩《あゆ》めば

ひさし　りに　に来て
友に　ひ
《かた》く手握り　《くちど》に　る

の木《こ》の　《ま》に
小　あそべるを
ながめてしばし　《いこ》ひけるかな

暗れし日の　に来て
あゆみつつ
わがこのごろの　《おとろ》へを知る

思出のかの　スかとも
おどろきぬ
の　の　りて　《ふ》れしを

の　《すみ》の　に
度ばかり見かけし
このごろ見　ず

のかなしみよ
君の　《とつ》ぎてより
すでに七月来《ななつき》しこともなし

のとある木　《こかげ》の　《すていす》に
思ひあまりて
をば　せたる

忘られぬ顔なりしかな
今日　《まち》に
《ほり》にひかれて　《る》める　は

《す》れば
ばかりの明るさの
中をよぎれる白き　《が》のあり

目をと　て
かすかに　きてみぬ
《ね》られぬ夜の　にもたれて

わが友は
今日も母なき　を負ひて
かの　《しろあと》にさまよへるかな

夜《よる》おそく
つとめ　よりかへり来　《き》て
今死にしてふ児《こ》を　《だ》けるかな

三《ふたみ》こゑ
いまはのきはに　《かす》かにも泣きしといふに
なみだ　《さそ》はる

白《ましろ》なる大　の　の　《こ》ゆる
うまれて
やがて死にし児《こ》のあり

おそ秋の　　を
三　四　《さんじやくしはう》ばかり
吸ひてわが児の死にゆきしかな

死にし児の
　　に　　の　を　す
　者の手もとにあつまる心

知れぬ　《なぞ》に　《むか》ひてあるごとし
死児《しじ》のひたひに
またも手をやる

かなしみのつよくいたらぬ
さびしさよ
わが児のからだ　《ひ》　てゆけども

かなしくも
夜明《よあ》くるまでは　り　ぬ
　《いき》きれし児の　《はだ》のぬくもり

本　集　　日本文学　集12　木田　歩　　木集　　四十　年
月七日初　、　四十七年　月十日　ただし、　は　日本文
学　集三　木集　三十　年　月十　日　一刷、同四十四年十月一日
四刷による
本の　本　初　本
スト　　j.utiyama
スト
文　　年　月